who's who 活躍する同窓

『地域につながりを生む』

58H　打越　紀子さん（岡田）

歌とともに

私は初等部からずっと聖歌隊に所属し、短大では高橋好子先生の音楽の授業を楽しみにしていました。グロリアスクワイアの一員として、オール青山のメサイアにも出演しました。

その後、就職、結婚、出産を経て、1991年に吹上町（現鴻巣市）に転居。子育てしながら生活クラブ生協のまちづくり活動に参加し、町議会議員も経験。そして生協が組合員のたまり場を作ることになった時、誘われるがままに週2回の文庫のボランティアスタッフになったのです。文庫というのは、幼児や小学生がやってきて、絵本を読んだり歌を歌ったりした後、ごっこ遊びやトランプ・カルタなどをして過ごす場所です。伴奏楽器としてウクレレを手に入れ、毎回「世界中のこどもたちが」でスタート。すっかり「歌のおかあさん」となりました。夏休みには「平和を考える親子のつどい」を企画、これは今も継続しています。

地域で居場所事業を

5年ほど文庫を続けるうち、子どもだけでなく大人も集まれる居場所を作りたい、と思うようになりました。

折よく近くの飲食店が廃業し空き店舗に。そこで、当時の生協の役員や文庫のメンバー、地域の団体にも声をかけ、一緒にワーカーズコレクティブ（全員が出資・労働・運営する形式の団体）を立ち上げ、2011年5月に「コミュニティカフェ幸茶店（こうさてん）」を開店したのです。東日本大震災直後でみんなが絆を求めていた時期でした。

飲食店としてのカフェは、正直なところ失敗でした。宣伝もろくにしていないのですから当然ですが、毎日閑古鳥が鳴いて、最初の時給は250円。一方、団体を立ち上げたらぜひやりたいと思っていたのが「移送サービス」でした。当時、国土交通省が自家用自動車による運送を認めるようになったばかりで、高齢者の通院や障害児の登園を手伝うようになりました。そこから障害児者生活サポート事業も引き受けるようになり、飲食事業の赤字を埋められるようになって、3年目にようやく最低賃金をクリアしました。

その後仕事の幅を広げ、高齢者だけでなく誰でも使える支え合いサービスや、障害者の居宅介護、入所や入院で空き家になった家を見守りするサービス等も実施しています。

それぞれの困りごとに寄り添う

2016年からいわゆる子ども食堂も始めました。「どなたでもどうぞ」というスタイルにしたことで、ひとり親、引きこもり、依存症、グレーゾーンの障害当事者等が地域に少なからずいることが見えてきました。退職した看護師さんの協力で無料相談日も設け、場合によっては公的支援につなぐようにしています。最近は、市役所や社協、地域包括支援センターや相談事業所からの紹介も増え、制度の隙間を埋めるサービスの意義を感じています。また、「働かせて欲しい」という相談にもできる限り仕事を切り分けて応じています。

青山学院のスクール・モットーは「地の塩、世の光」ですが、これは平たく言えば初等部でいう「親切にします」だと思います。目の前に困っている人がいたら助ける、自分で助けられなければ話を聞く、一緒に考える、伴走する。それを続けていると、不思議と周りにも親切な人が集まり、「手伝いましょうか？」と言ってくれたり、「こんなこともやってみたら？」と提案してくれたりします。

できる人が、できる事を、無理のない範囲で。これからも「誰もが地域に居場所と役割とつながりを持てる社会」を目指して、活動していきます。

コミュニティカフェ幸茶店
埼玉県鴻巣市吹上富士見3-1-7

You Tube
「厚生労働省 労働者協同組合こうさてん」
で活動の様子が、「**うちこしのりこ**」で演奏が見られます。